



社員、パートだけで586人 広がり続ける「献血」の輪

(株)金馬車

血液センターの献血ルームへ、あるいは各地に出動した献血車へ、若い男女から中年、お年寄りまで、この期間、献血者が続々と集まっています。献血が終わると、みんな一様に晴れやかな笑顔。こんな簡単にだれもが社会貢献ができるという喜びにあふれた笑顔です。茨城県でパチンコチェーンを展開する(株)金馬車の呼びかけによる「愛の献血運動」に参加した金馬車の社員、パート

さらには地域住民の方々です。かつては、全国的に盛んだった献血運動も、さまざまな曲折があつて最近ではやや下火。特に若者の献血離れが進んでいるといわれます。そのため輸血や血液製剤の製造になくてはならない人

折があつて最近ではやや下火。特に若者の献血離れが進んでいるといわれます。そのため輸血や血液製剤の製造になくてはならない人

の血液も、ともすれば不足がちの昨今です。かといって、かつてのような買血は禁止され、倫理上の問題もあつて輸入血液に多くを頼るわけにもいきません。もっぱら日本人による日本人のための無償の献血に頼らなければならないのが現状です。こうしたなかで、大々的に献血運動を繰り広げる金馬車の「愛の献血運動」が各界から注目を浴びています。

各店舗が推進、地域へも

金馬車が献血運動に乗り出したのは、平成15年のこと。昭和33年から茨城県日立市に本拠を構える同社は、創業当時からさまざまな地域貢献を行なってきました。会社の発展に「それだけでいいのだろうか」という機運が生まれました。高濱正敏社長の発案で、社内に「社会貢献委員会」が発足しました。ある委員から「みんなで献血するというのはどうだろう」との提案がありました。献血なら、気持ちさえあれば、だれでも簡単にできる。社員だけでなく、



献血を行う金馬車の社員。金馬車の呼びかけにこたえて、献血に応じる地元の住民。茨城県水戸市のフレスポ赤塚(カスミ赤塚)店で

多くの人を巻き込んで、幅広い社会貢献を考えた、委員会の趣旨にぴったりの。それでいいこうということになり、善は急げと、県内の献血ルームに連絡し、協力を申し出た。ところが、はじめは自社の社員、パートの反応はいまいち。地域の人の反応はさらに低かったのです。はじめの参加者43人、次は92人。これではいかんというので、各店舗に推進委員を設置、名簿作りや献血期間を設けて会社ぐるみで積極的な呼びかけを行なったところ、3回目は、いきなり349人もの参加者を集めることに成功しました。近年は、年2回行なわれる金馬車の「愛の献血運動」には700名強の応募者があり、平成20年度の場合、茨城県全体の献血者の実に1・3%になるといふ大きな運動に発展しています。現在行なわれている第12回「愛の献血運動」では、社員、パートの参加者だけで586人にも達しているそうです。1200名という金馬車の全従業員の実に45%、半数近い人が参加していることになりました。残りは地域の住民。運動の中心は各店舗の店長ですが、それだけ店が地域に根を下ろしているということなのでしょう。金馬車の「愛の献血運動」は、平成20年2月、「県民健康づくり表彰式」で表彰され、茨城県知事並びに日本赤十字社茨城県

店内に設置された「プルタブを集めて車椅子を送ろう」の看板



多彩な社会貢献への取り組み

支部長から感謝状が送られました。金馬車には、ほかにもさまざまな社会貢献活動があります。金馬車は、もともとレストラン業から出発した会社。それを受け継ぐフード事業部が、地域への恩返しにと、毎年、地元日立市の社会福祉施設で行なわれる「年忘れ会」に料理を提供する活動を始めたのがキッカケでさまざまな社会貢献活動が始まったといえます。新潟中越地震の被災者への救援活動などにも取り組みました。最近注目されているのが、「プルタブを集めて車イスを贈ろう」という運動への参加です。この運動は、空き缶公害を防ぎ、身の回りの環境を守り、環境意識を高めると同時に、車椅子を寄付することで、社会福祉にもつなげようという、一石二鳥を狙った市民運動です。金馬車では、各店舗にプルタブ回収ボックスを置き、お客さまにも呼びかけて、プルタブ回収運動を行なっています。これまで回収したプルタブは、実にドラム缶12本にも上るといいます。プルタブはドラム缶1本で約18万個、9本で車イス1台分のアルミが回収されるといいます。